

## 鹿児島県鹿屋市名主原遺跡出土の古墳時代人骨

### Human skeletal remains of protohistoric Kofun period from myozubaru site, Kanoya, Kagoshima, Japan

竹中正巳・満田タツ江・今村朋代

Masami TAKENAKA, Tatsue MITSUDA and Tomoyo IMAMURA

#### はじめに

2005年2月、鹿児島県鹿屋市名主原（みょうずばる）遺跡内で発見された地下式横穴墓6基が調査され、その内の2基から古墳時代人骨が出土した。地下式横穴墓は古墳時代の南九州の東側半分でも多数造られた。地下式横穴墓は古墳時代の南九州を特徴づける墓制の一つであり、当時の南九州に居住した人々が造営した墓である。地下に玄室を設け、玄門を石や粘土塊で閉塞したため、玄室天井の土が崩落しなければ、遺体や副葬品の周りを取り巻く環境が保たれる場合が多く、人骨や副葬品の残りもよい。

これまでに出土した地下式横穴墓から出土した人骨の分析から、南九州の内陸部の集団は縄文人的特徴を色濃く残すとされてきた（内藤，1985；松下，1990）が、宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群から出土した約100体の人骨の研究から、南九州の内陸部の集団の中に、渡来系弥生人の遺伝的影響をある程度受けたと考えられる集団が存在することが明らかになった（竹中，2001）。次に、資料の制約はあるものの、南九州の古墳時代人の特徴が全体として近現代人とはかなり違うことが明らかになった（竹中，2006）。この南九州におけるヒトの形質の時代差が具体的にどのような過程を経て形成されたかについてはよく分かっていないが、熊襲・隼人による度重なる反乱が収まり、南九州に度重なる移民政策が採られた奈良時代末以降の古代の人の動きが大きな鍵を握っているのは確かだと思われる。

また、南九州における古墳時代人骨研究の課題としては、地下式横穴墓から出土した人骨の地域的偏在が挙げられる。地下式横穴墓が造営された地域は、霧島山麓周辺の内陸部から宮崎平野部、大隅半島にかけての地域である。南九州の古墳時代人骨は、現在までに、750体を越える人骨が地下式横穴墓から出土しているが、そのほとんどは宮崎県の山間部から出土したものであり、宮崎平野部や大隅半島地域からはそれぞれ10体を越える程度の数しか出土していない。

今回報告する名主原（みょうずばる）遺跡内の地下式横穴墓から出土した古墳時代人骨の保存状態はよくない。しかし、古墳時代の大隅半島に居住した人々の形質や文化、生活、風習等を今後解明する上での貴重な資料である。

### 研究資料および研究の方法

研究を行った人骨は、鹿児島県鹿屋市名主原（みょうずばる）遺跡 1 号地下式横穴墓と 6 号地下式横穴墓から出土した古墳時代人骨である。いずれも 1 体のみが埋葬されたと考えられる。

1 号地下式横穴墓の玄室は、長軸 1.9m、短軸 0.67m、高さ 0.45m の箱形であった。竪坑の玄門側の面には赤色顔料が塗布されている。玄室の閉塞は人頭大や握り拳程度のアカホヤ火山灰ブロックにより行われている。玄室内には石棺は確認されず、人骨は保存状態が悪く、頭蓋の一部と歯だけが遺存している。副葬品も鉄刀が 1 本遺存しているだけである。

6 号地下式横穴墓の玄室は、長軸 2.2m、短軸 1.35m、高さ 0.36m のドーム形であった。玄室の閉塞は人頭大や握り拳程度のアカホヤ火山灰ブロックにより行われている。玄室内には石棺は確認されず、人骨は保存状態が悪く、頭蓋の一部と歯だけが遺存している。副葬品も鉄剣が 1 本遺存しているだけである。

研究は肉眼観察と計測によって行った。歯の計測は藤田（1951）に従った。

### 人骨の所見および考察

#### 1 号地下式横穴墓出土人骨（性別不明・壮年）

遺存する人骨は頭蓋の一部と確認できる程度の小骨片のみである。従って性別は不明である。歯は上顎右中切歯と同右犬歯が遺存している。咬耗は 2 本とも Martin の 1 度であり、年齢が壮年と推定される。歯の大きさは表 1 に示すとおりである。

表 1. 鹿児島県鹿屋市名主原遺跡 1 号地下式横穴墓出土人骨の歯の大きさ (mm)

歯種	近遠心径	頬舌径	歯根長
上顎右中切歯	9.35	—	11.15
上顎右犬歯	8.14	8.95	13.8

歯は一般に男性の方が女性よりも大きい。渡来系弥生人と縄文人とは歯の大きさに違いがあり、渡来系弥生人の方が縄文人よりも有意に大きい (Matsumura, 1994)。渡来系弥生人男性の上顎中切歯の近遠心径の平均値は 8.80mm、上顎犬歯の近遠心径のそれは 7.55mm、頬舌径のそれは 8.68mm である。

本人骨が男女いずれであったにせよ、遺存する本人骨の 2 本の歯の大きさは渡来系弥生人男性よりも大きい。従って、本人骨の歯には渡来系集団の遺伝的影響が現れていると考えられる。

#### 6 号地下式横穴墓出土人骨（性別不明・熟年）

遺存する人骨は頭蓋の一部と確認できる程度の小骨片のみである。やはり性別は不明である。歯は 20 本が遊離歯の状態に遺存する。遺存する歯を歯式で表す。

× × 6 5 4 6 2 1		1 2 3 4 5 × × ×
8 7 × 5 4 3 × 1		1 × 3 4 5 × × ×

咬耗は 2 本とも Martin の 2 度であり、年齢が熟年と推定される。歯の大きさは表 2 に示すとおりである。

表2. 鹿児島県鹿屋市名主原遺跡6号地下式横穴墓出土人骨の歯の大きさ (mm)

歯種	近遠心径	頬舌径	歯根長
上顎左中切歯	8.80	7.86	11.04
上顎左側切歯	8.09	7.44	15.36
上顎左犬歯	8.03	8.73	15.80
上顎右中切歯	8.80	7.96	11.37
上顎右側切歯	7.46	7.35	15.37
上顎右犬歯	8.05	8.56	17.60
上顎右第二小臼歯	6.83	9.69	13.48

Matsumura (1994) によれば、渡来系弥生人男性の上顎中切歯の近遠心径の平均値は8.80mm、頬舌径は7.51mm、上顎側切歯の近遠心径は7.41mm、頬舌径6.90mm、上顎犬歯は近遠心径が7.55mm、頬舌径が8.68mm、上顎第二小臼歯は近遠心径が7.11mm、頬舌径が9.49mmである。

本人骨が男女いずれであったにせよ、遺存する本人骨の歯の大きさは渡来系弥生人男性よりも大きいものがほとんどである。渡来系弥生人男性の平均値を下回る上顎右犬歯頬舌径にしても、上顎右第二小臼歯の近遠心径にしても、縄文人男性の平均値を上回る。従って、本人骨の歯には1号地下式横穴墓出土人骨同様、渡来系集団の遺伝的影響が現れていると考えられる。

### 引用文献

- 藤田恒太郎 (1951) 歯の計測基準について. 人類学雑誌61: 27.
- Matsumura, H. (1994) A microevolutional history of Japanese people from dental characteristics perspective. *Anthropological Science*, 102: 93-118.
- 松下孝幸 (1990) 南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究. 長崎医学会雑誌65: 781-804.
- 内藤義篤 (1985) 南九州およびその離島. シンポジウム「国家成立前後の日本人—古墳時代人骨を中心に—」. 季刊人類学16(3): 34-47.
- 竹中正巳 (2006) 南九州から出土した先史・古代人骨の時代的特徴. 先史・古代の鹿児島 (通史編). pp.679~692. 鹿児島県教育委員会. 鹿児島.
- 竹中正巳・峰和治・大西智和・小片丘彦・染田英利 (2001) 宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨. えびの市埋蔵文化財調査報告書29: 1-107(別編).

(2010年11月30日 受理)